

「子どもたちと公共交通」

Eさん：今の子どもたちが普段の生活の中で公共交通に乗る機会は、ものすごく少ないです。

そうなると、今後、彼らが次の社会的経済を担う世代になったときに、車が前提の動きや生活しかしたことがないので、路面電車・バスにはノスタルジーも何も感じないわけです。私たちが仕事にしろ、通学にしろ、買い物にしろ、公共交通にどんどん乗って行けるような体系になっていないと、この先高齢化が進んだときに、乗るのは高齢者だけで、若者世代は車の移動が前提になるのではないかと思います。ビジョンを策定するときには、今の子どもたちにも公共交通に触れ、乗る機会をどう設定していくのかも、考えておかなければいけないと感じています。

知事： おっしゃる通りだと思います。そういう観点を入れて検討したいと思います。

Cさん：子どもとどこかへ行かれるときに、今の高知県は車が無いとすごく厳しい状態だと思います。高知市内の子どもだったら、図書館・博物館施設に行くにしても自分で自転車で行けると思います。例えば、中村・安芸・室戸だと思っても自分で行けません。子どもが公共交通に乗る機会、乗ろうと思えるチャンスを作ってあげたらもっと自由に行きたいところへ行けるのではないかと思います。

知事： そうですね。どれだけ生活の中で普通になっているかが重要でしょう。東京なんかでは、電車で子どもも当たり前のように乗っています。せめて高知市内で使い方をしっかり教えるとか、学校でも公共交通機関を使うような体験を、もっと作ってもらいたいかもしれません。

Eさん：社会の意味を学ぶ場でもありますし、譲り合いや順番を守るなどの公共性が身につく。あと、路面電車やバスの中はお年寄りとの異世代交流の場にもなります。